

図書館は「珍味」の宝庫

さくらい まさとし
櫻井 政寿

(医学部助教)

大学の医者の仕事は大きく臨床と研究に分けられる。臨床とは実際に患者さんの診療にあたることで、いわゆる「お医者さん」の仕事、研究とは医学者として病気の原因を解明し、新たな治療法を生み出す仕事だ。多くの医師がそうであるように、僕も大学病院で臨床と研究の両面を学んでいる。この両面の違いはいろいろあるが、その最大の違いの一つは考え方の方向性だと思う。

患者さんの診療は、こういった症状を訴えたらどういった検査をするとか、この病気の治療にはこの薬を使うなど、基本的な型が存在し、普通はそれに従う。そういった問題が同時並行でいくつも起こるので、なかなか一筋縄ではいかないのが医療だが、判断に迷った場合は「みんなだったらどうするだろう」という視点から考える。ブラックジャックのように「私ならこうするね」とみんなの度肝を抜くような治療を行うことは、通常の医療界では許されないのです、彼はモグリの医者をしている。

片や、研究の世界ではよく「独創性」の重要性が説かれる。研究とは今まで明らかでなかったことを解明していく作業であり、その行程に光は乏しい。時にはゴールすら見えない暗闇を、試行錯誤を繰り返しながら進んでいくのが研究だし、前人未踏の道だからこそ価値がある。みんなと同じことを考えていても、行き着く場所は限られている。みんなと違う道のりを進むこと、時に「逆張り」をすることは、それがすべてではないにしても、独創的かつ魅力的な研究の必要条件だろうと思う。

しかし正直に申し上げて、独創的な発想などそうそう出てくるものではない。かといって、世界を変える発想をしたアインシュタインは5歳まで話さず、エジソンは小学校で退学になったと聞くけど、自分はこの年齢まで結構まっとうに生きてしまっているし…と過去のことを今更振り返っても仕方がない。

ヒトは様々な知識を input し、それを吸収消化して新たな知識として output する生き物である。Input する知識が変われば当然 output も変わってくる。であるならば、独創的な out-

put をするためには、input する「食べ物」もやはり少しは独自の風味にしておく必要があるのではないだろうか。

みんなと異なる「食べ物」はどこに行けばあるのか——その一つの答えが図書館である。図書館は誰もが見向きもしない知識に溢れている。例えば「一度も貸し出されていない本」。そもそも図書館はこうした本のために存在する。何度も借りられるような人気のある本は、当然売れるので本屋さんにも置いてある。しかし誰も借りない本は、本屋さんが慈善事業でない限り、いずれは本屋の書棚からは消える運命にあり、そういった本が未来の読者と接点を保つのは図書館しかなくなる。何年間も一度も借りられなくても、いつかは必要としてくれる人が現れるのをひっそりと書庫の奥で待ち続ける。それを可能にしている図書館は、やはり貴重な存在である。

大学図書館にある誰にも借りられない本は、みんなと向いている方向が違うから今注目されていないだけで、そこには「逆張り」のアイデアがたくさん詰まっている。だから、たまにはそういった「珍味」を味わい、自分だけの風味を調合していくことは、独創的な output を生み出すきっかけになる。そしてそのような本を「発掘」するのも僕ら図書館利用者のささやかな楽しみの一つだと思う。

ある文献によると、三田メディアセンターでは、一度も貸し出されていない「非貸出図書」は、60.2%にも上るらしい（教員の選書した和書に限る）¹⁾。実に半分以上が一度も館外に出ることのない生活を送っていた。でも、この数字は図書館、特に大学図書館にしか許されないことだし、これが使命だ。

今後も時代の流れに惑わされず、大学図書館にはその使命を果たしてもらいたいと強く願う。その中から必ずや break-through が生まれると信じて。

参考文献

- 1) 小泉公乃. 蔵書評価法からみた図書館員と教員の選書. Library and information science. 2010, no. 63, p. 41-59.

